

昭和 62年 4月 26日 (日)

第 152 回

# 史跡めぐり資料

都下 小金井方面



大岡昇平



小金井 小次郎



新藤 勇

## はけの道

越谷市 郷土研究会

加藤 幸一

## 第152回 史跡めぐり

- 案内場所 都下・小金井方面
- と き 昭和62年4月26日(日)
- 集 合 国鉄・南越谷駅前 午前8時40分
- コ ー ス 南越谷駅++++西国分寺駅++++武蔵小金井駅(南口)・  
1 六つ辻に置かれた六地藏\*---2 金蔵院の榎と椋の木---  
3 狭客小金井小次郎の墓---4 地藏の庚申塔---5 小金井  
神社の泊犬---6 はげの道(「武蔵野天人」の舞台で  
武蔵野の面影残す)①谷口宅の湧水\* ②はげの小路  
③小金井木田跡碑 ④野川 ⑤武蔵野公園---7 二枚  
橋之記---8 野川公園---9 湧水の太沢巾着\*---10 野川  
の水車\*---11 近藤勇の墓と生家跡---野川公園管理所\*  
野川公園バス停---三鷹駅-----南越谷駅

\*印は 現地の人々の解説予定

昼食場所 野川公園川べり 雨天は公園内休憩所  
弁当持参の事

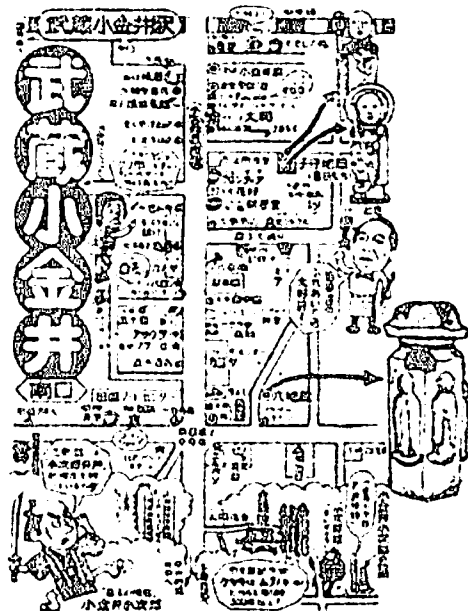
案内者 越谷市郷土研究会理事 加藤 幸一

野川<sup>のかわ</sup>に沿って、ながい丘陵が続いています。この丘陵は野川が作った河岸段丘で、その崖を工地的人は昔から「ハケ」と呼んでいます。この「ハケ」に沿ってそこそこに湧水<sup>ゆみづ</sup>があり、その湧水を利用した名園・公園・神社・仏閣が点在しています。この崖のすそをたどる「はけの道」は武蔵野の面影が残る散歩道です。しかも、大岡昇平氏の小説「武蔵野夫人」の舞台にもなった地であり、文学散歩としても最適です。

「はけの道」に引き続き、野川公園内の野川に沿った遊歩道を通って武蔵野の緑と水をゆっくりと満喫していただき、越ヶ谷宿に一泊したところのある近藤<sup>ちか</sup>勇<sup>ゆう</sup>の墓を詣でたあと、野川公園管理所にて野川の自然についてお話を聞いてから帰路に向かう予定です。

### 1. 六つ辻<sup>むつとじ</sup>に置かれた六地蔵

「六地蔵」と土地っ子が呼ぶ地蔵尊のほこらは今では前原坂上交差点を少し奥に入ったツツジの咲く商店会名義の敷地に建っている。この交差点は、かつては東西に伸びる江戸道の他に、南北の志木街道などが交わり、六つの辻となっていた。この六つ辻に六角の石柱（これを六面石幢<sup>むつめんせきじょう</sup>という）の六面にそれぞれ地蔵が浮き彫りされた六面石幢六地蔵が建てられていたものである。

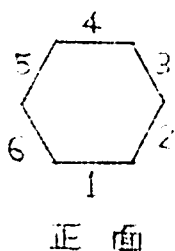


武蔵野新聞 S53・5・8 より

このような六つ辻を「六道の辻」とみなして、よく六地蔵がまつられていたものである。地蔵の縁日は24日、特に7月24日（今では月遅れの8月24日）が年間で最大の縁日。地蔵盆（地蔵祭、地蔵<sup>じざう</sup>旗などともいう）である。

ここに昔から「六地蔵の店」と呼ばれた店がある。酒店経営の大久保直<sup>ただみち</sup>通<sup>みち</sup>氏の店である。六地蔵のあるこのあたりの地名を俗に

六地藏と呼ばれる。この六地藏の店は戦前、目と鼻の先にあった村役場(今の小金井市福祉会館の地にあった)の仕出し弁当から、わらじ、ゲタ、洒など日常雑貨を売るよろずやで、お地藏様のお守り(金蔵院発行)や絵馬も売った。絵馬には地藏絵馬の他に女性の拝み絵馬などもあった。そして六地藏まいりに埼玉県など遠くからも多くの人 came。そんな訳で、六地藏の店の主人は、この六地藏のほこらを立派に改修して何とかお地藏様の縁日を復活させたいそうである。



左図で

- 1の面 - 両手で蓮の花を持つ地藏。上部に六地藏の種子の一つである“<sup>イ</sup>”の梵字が刻まれている。
  - 2の面 - 両手で柄香炉(柄のついた香をたく入れ物)を持つ地藏。上部に地藏の種子“<sup>カ</sup>”の梵字が刻まれている。
  - 3の面 - 右手に錫杖(上端の円環に数個の錫の輪を付けた僧の持つ杖)、左手に宝珠(上部がとがった一種の珠(玉))を持つ地藏。上部の地藏の梵字は“<sup>イ</sup>”。
  - 4の面 - 手や瓶の部分が欠けていてどんな地藏か不明、合掌(両手の掌を合わせること)あるいは数珠を持つ地藏かも。上部の地藏の梵字は“<sup>イー</sup>”。
- また、向かって右側わきのたてに、文字が次のように刻まれている。  
 奉建立六地藏造品 念佛講中 爲二世安樂也 武州多摩郡小金井村  
 向かって左側わきのたてに、紀年銘が次のように刻まれている。  
 吉 宝永四年<sup>イ</sup> 閏 九月廿四日  
 宝永4年とは西暦1707年、今から280年前、江戸中頃である。
- 5の面 - 両手で 幡(花紋具の一つ、竿に長い布を下けた一種の旗)を持つ地藏。上部の地藏の梵字は欠けていて見えない。
  - 6の面 - 5の面と同じく、両手で 幡を持つ地藏。上部の地藏の梵字は欠けていて見えない。
- 5の面や6の面の上部の梵字は“<sup>イ</sup>”や“<sup>ラン</sup>”が刻まれているのかもしれない。それとも、もともと何も刻まれていなかったかも。

## ◎六地藏

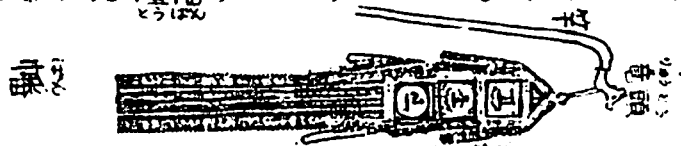
六地藏とは、苦しみの「地獄」、むさぼりの「餓鬼」、おろかさの「畜生」、あらそいやいかりの「修羅」それに「人」(人間)

「天」(天上)の六つの迷界を輪廻転生するわれわれ衆生を地蔵菩薩が救済できるように、つまり六道のどこにいても地蔵が救いの手をさしのべられるように、六つの分身としてあらわされたものである。

このように六つの分身を考えて六体の地蔵を信仰することは平安末期に始まったとされている。六地蔵の石仏が寺院の門前や墓地の入口に一般に見られるようになるのは室町末期からである。

この石造六地蔵には、舟形光背浮彫り像を六体並べたものが多く見うけられるが、他に、一石に六体を横に並べて彫ったもの、石幢の六面に彫ったもの、角柱の四面のうち三面に二体ずつ彫ったもの、一石を上下二段にして上段と下段に三体ずつ彫ったものなどがある。

六地蔵のそれぞれの持ち物などは一定していないが、最も多いのが、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ姿である。他に、両手で数珠を持つ地蔵、右手施無畏印、左手引楨印を示している地蔵、合掌している地蔵、両手で柄香炉(柄のついた香炉)を持つ地蔵、両手で幡(あるいは幢幡)を持ってかざしている地蔵などが見られる。



この史跡めぐり資料を作成するにあたって 次にあげるものを 主に参考・引用いたしました。感謝いたします。

読売新聞

- S53・5・8 武蔵小金井駅南口
- S56・1・26 はげの道
- S58・3・28 小金井小次郎
- S60・1・14 二枚橋悲恋
- S60・9・16 大沢わさび
- S61・2・3 はげの道

東京都公園協会発行

- S60・8・1 都立野川公園のあらまし

朝日新聞

- S57・6・13 近藤勇始末記に新説

広報こしがや

- 市史編さんだより No.132 近藤勇遺稿一件

野川公園管理所発行(おもなもの)

- S60・7 野川公園付近の地形と地質
- S60・9 野川沿いの湧水を訪ねる散歩道
- S61・1 野川公園の水

大沢住民協議会発行

- 「野川は語る」等 著者 故菊地全明

むさしこがねい

志木へ

昔の道

昔の道が今でも残っているのは東西の江戸道と六地蔵の店以南の志木街道のみとなっている。

江戸道と志木街道に面していた六地蔵の店は江戸時代、茶店をかねたよろずやであったと考えられる。

志木街道は馬喰<sup>ばくろ</sup>などもよく往来していたので道端に馬頭観音が見つけられる。

六地蔵が置かれた場所(昔)

六地蔵が置かれている場所  
昔の石川用水の上あたり

— 古道  
— 用水路  
■ 家

## 2. 金蔵院のケヤキとムクノキ

銀杏の木をはさんで右が椋の木、左が欒である。市天然記念物で、どちらも樹齢300年以上だという。

## 3. 俠客 小金井小次郎の墓

幕末から明治初めにかけての動乱期に、江戸近郊の武州多摩で威勢を張った博徒の親分、子分3十人を抱える前科持ちの俠客であったが、地元では今でも名士扱い。多摩の各地には手紙類、はんでん、たばこ入れ、ツエなど小次郎ゆかりの品々がまだ数多く残っている。手紙などを見ると、漢字まじりの達筆な筆遣いで、教養豊かな常識人であることがうかがえるという。



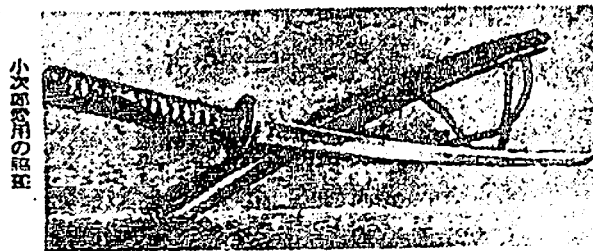
晩年の小次郎の肖像画  
(二世五姓田力御門)

小金井小次郎は、下小金井村の名主をつとめた旧家閥家の次男として文政元年(1818)に生まれ、10代で勘当されたあと小金井を去り旅がラスの生活に明け暮れたが、20歳過ぎてから男だてとして売り出す。武州二塚明神(小平市)で起きた出入りに加わって、石川島の人足寄場(御寄場)に服役。この時、浅草の火消しの男だて新門長五郎と知り合い、弟分となる。その後、いったん釈放されたが、再び捕まり、伊豆の三宅島へ流された。明治元年(1868)、許されて東京に戻り、その後は時折、「小治郎」とも名乗った。維新の混乱に迷う若者をつれて再び三宅島に渡り、島の開発に尽くす。明治14年(1881)6月、64歳で死亡した。

晩年の小次郎は浮草稼業を嫌って、子分に正業に就くようすすめたり、小金井一家は自分一代で解散するように言い含めていた。しかし、小次郎の死後、勝手に跡目を継ぐ者が出た。この流れをくむのが、暴力団ニ率会小金井一家で、今でも国電中央線沿いに構成員600人を持ち、警視庁から要マークの存在となっている。

墓は西念寺の南側の金蔵院墓地にあり、山岡鉄舟の筆による追悼碑がみられる。昭和38年に作られた石囲いには歴代の小金井一家総長や各地の子分衆の名前が並んでいる。

左の写真は 小金井市役所社会教育課に保管されている小次郎の脇差である。「肥前国藤原忠吉」の銘が入っている。杉並区荻窪三丁目に住む



常陸弥次氏<sup>つとむつ</sup>の寄贈。常陸家は以前甲州街道の府中宿にあって、なぜか小次郎がしばしば出入りしていた。明治9年に廃刀令が出ると、小次郎は脇差を弥次氏の祖母に預け、そのままになったものという。

なお、小金井市と三宅島とは 島民のために尽くした小次郎が取り持つ縁で 姉妹都市となっている。

小次郎の墓の近くに、樹令百数十年といわれるしだれ桜の古木がある。「小次郎桜」と呼ばれ、市の天然記念物に指定されている。

#### 4. 地蔵の庚申塔

この金蔵院墓地の入口に 本尊が地蔵の庚申塔<sup>こうしんとう</sup>がある。小金井市教育委員会の説明板には「この塔は、江戸時代前期寛文六年（1666）造立<sup>つくりたて</sup>の小金井市最古の庚申塔です。特に本尊が地蔵であることは珍しく、多摩地区としても古いものです。地蔵像と三猿<sup>さんざる</sup>の左右には、四十名ほどの造立当時の姓名が刻まれています。」と記されている。三猿がみられるので庚申塔とわかる。この頃の主尊は 地蔵あり、釈迦あり、大日如来あり、阿彌陀あり、不動明王ありで定まっていな<sup>い</sup>い。よくみられる「日月・青面金剛・二鶏・三猿<sup>さんざる</sup>」は もう少したった元禄年間（1688～1703）頃からよく作られるようになる。そして庚申様<sup>こうしんさま</sup>というとき青面金剛をさすことが多くなる。



## 5. 小金井神社の狛犬

「<sup>關</sup>小治郎」の字がみられる。小金井小次郎が奉納した一対の狛犬である。

なお、境内には「石臼塚」がある。説明板には次のように書かれている。

石臼は遠い昔、石器時代からわれわれに欠くことのできない生活の道具として親しまれてきた。何千年となく使われてきた石臼は時代により場所により変化を見せてきたが、この大戦後の生活様式の急変はついに顧みられないものとなり、いつとはなしに一つ一つ姿を消すありさまに、心ある人々はこの里にのこるすべてを集めて塚を造り、感謝をこめて、人と臼との久遠の別れとするものなり。 昭和43年6月吉日

## 6. はけの道（「武蔵野天人」の舞台で武蔵野の面影残す）

### ◎「はけ」とは

小金井市の南部にほぼ東西に走る崖がある。学問上の呼ぶ名は「国分寺崖線」。南向きの斜面で段差は十数メートルに及ぶ。そこは古くから「はけ」と呼ばれ、幾筋もの地下水がわき出て、野川に流れ込んでいる。武蔵野台地のいわば南端に当たる

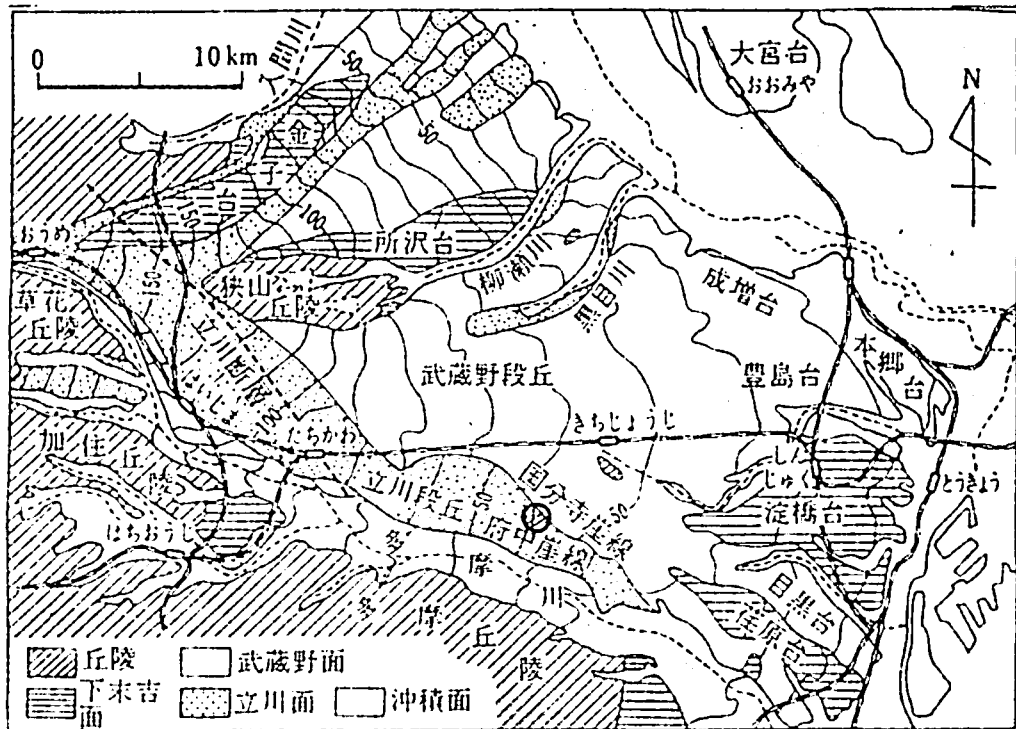
南向きの「はけ」は、北風もなく冬でも暖房が不必要なくらい暖かい。大正時代までは農家が点在するだけであったが昭和元年、中央線武蔵小金井駅が完成すると、退役軍人、医者、弁護士、画家など名士が余生を別荘のようにして住むようになり、戦後はベッドタウンに変ぼうした。

### ◎「はけの道」の命名者

金蔵院の前に「ハケの道」の標示板がある。金蔵院前から二枚橋あたりまでの道をさしているようだ。「はけの道」と命名されたのは去る48年、小金井市が市制施行十五周年を記念して、市内の道路の愛称を募集したもので、名付け親は、やはり「はけ」の高台に住む渡辺斧光氏である。

国分寺崖線

北西端は立川の北東に始まり、中央線を国分寺の東で横切って国分寺・東京文台・深大寺・成城公園から二子玉川へと続く長さ10、20kmに及ぶ崖である。



⑤ 多摩川谷図 武蔵野台地の地形 (貝塚爽平 (1964) による)

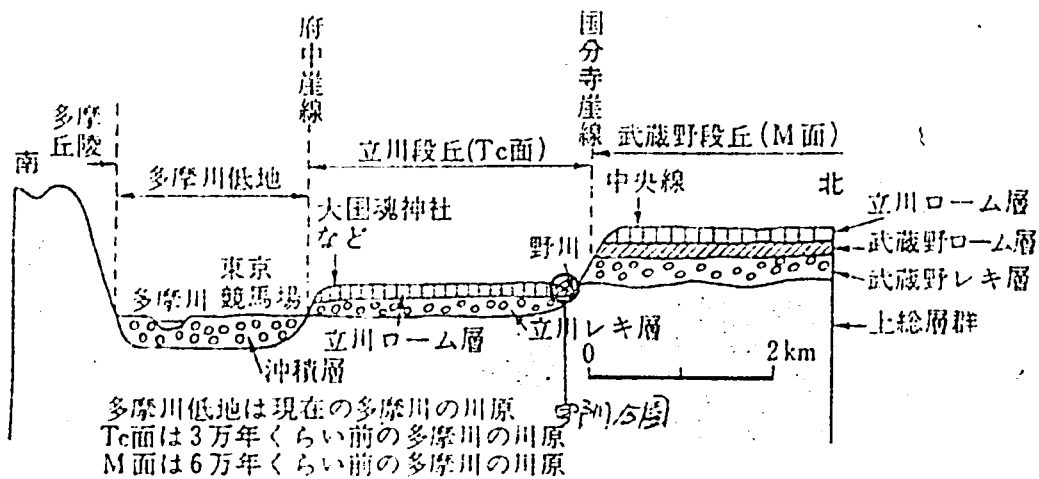


図 III-43 小金井・府中をとる南北断面図 (貝塚爽平 (1976) による)

はけの湧水は、七因で武蔵野礫層の所から湧き出している。

### ⑥ 『小金井』の地名の起こり

はけに湧き出る多くの「わき水」を『黄金こがねにもかえがたい貴重な水』ととらえ、これが「黄金の井」、つまり小金井の名の起こりであると考えられている。

## ◎小説『武蔵野夫人』について

大岡昇平の小説「武蔵野夫人」の中に、『斜面に深く喰い込んだ「はけ」の窪地は鳥の通い道であった』という一節がある。小説のヒロインは「はけ」の地に移り住んできた官吏の娘で、私大フランス語教師を夫に持つ古風で貞淑な人妻、宮地道子。「終戦三年目」とあるから昭和23年、従弟の勉が復員してきたことから物語は始まる。近くに住む親類の大野夫妻、それに「はけ」の旧家、荻野家などが登場するが、全編に、「はけ」を中心とする武蔵野の自然描写が印象深くちりばめられている。

大岡昇平氏もまた南方から復員してきて、23年1月から11月まで、この地に住んだ。「武蔵野夫人」は、25年1月から文芸雑誌「群像」に連載され、今なお愛読者が多いという。

### ① 谷口宅の湧水

谷口家は、武蔵小金井駅ができて名士たちが続々と移り住んだ昭和2・3年頃、文男氏が中学生の時に湧水のあるこの敷地に引っ越してきたそうです。カルキ(さらし粉)味のする水道の水をきらって今でも湧水を飲料水(水温15.6度)に利用しているとのこと。庭には今ではからとなった池が残されています。

### ② はけの小路

宮地家のモデルとなった中村家にも湧水があって、この湧水が小川となって流れ、その小川に沿った小路が遊歩道として整備された。幅約3m、延長約90mである。「はけの小路」と命名され、「はけの小路」の碑が入口にある。



### ※「武蔵野夫人」の舞台となった家々

- ・「宮地家」のたたずまいにあたる中村家

中村家の敷地は、ざっと1,000坪。小説では「木は窪地の

奥が次第に高まり、低い崖となって尽きるところから湧いている」と描かれているように、この広い敷地の、モウソウ竹の茂みの奥の崖下から今も地下水がわき出して「はけの小路」に沿って流れ、野川に注ぎ込んでいるのである。

故中村研一氏（画家）は戦争で家が焼かれ、代々木からこの地に引っ越してきたもので、あとから引っこしてきた大岡昇平氏と知りあう。

なお、富子未亡人は今も弟さん一家と暮らしていてご健在だそう。

・「はけの荻野家」にあたる渡辺善一氏宅

「はけの荻野家」は小説の通り、ちょっとした高台にあった。本当の姓は渡辺家。小説の中で武蔵野の象徴として印象深く描かれているはけの家の「一本のケヤキ」は、残念ながら、十数年前に切り倒された。幹の太さは七人抱え位だったそうである。

・「大野家」のたたずまいにあたる富永家

大岡昇平氏が、昭和23年1月から11月まで、故富永次郎氏（文学者）宅に家族と共に寄寓し、小説の構想をねった家でもある。富永家の家のたたずまいが、小説の大野家のモデルになったと言われている。

③ 小金井水田跡碑

碑文は 次の通り。

人の生活と水はいつでもどこでも深い関係があったとは証明されているが、この近くでも崖下から各所に湧水がみられ、七・八世紀の頃には人が住んでおり上流から野川沿ひには帯状に水田が開拓されたことは推定される。

小金井市の史料によると

寛永十二年(西暦1635年)	十三ヘクタール
享保九年(西暦1728年)	二十ヘクタール
明治十三年(西暦1880年)	三十六ヘクタール
明治二十三年(西暦1890年)	四十九ヘクタール
大正十三年(西暦1924年)	二十七ヘクタール
昭和四十三年(西暦1968年)	七ヘクタール

(この年 献穀田に指定された) 奉耕者 鴨下栄一

このやうな変遷の末、都市化により住宅地と変り、一部は武蔵野自然公園となった。

永年吾々の祖先が困難とたたかいながら開拓し稲作りに努力してきたが、昭和四十五年を最後に五ヘクタールの水田もその姿を消すこととなった。この機会に水田耕作者は祖先への感謝と追憶のため記しておくものである。

「はけ」の上の武蔵野台地が、玉川上水の開発とともに開拓された新田だったのに比べ、わき水が豊富な「はけ」の下は、古代人の住居跡もあり、かつては稲作も盛んだったはずである。

昭和45年まで330年以上も続いた米作の歴史を記した和紙やモミなどをツボ(カマセル)に入れ、埋めた上に碑が建立されたのである。

#### ④ 野川

野川公園の説明板「野川のあらまし」によると

野川は多摩川の支流の一つで、国分寺崖線(ハケとよばれる段丘崖)の崖下から湧き出た水を集めて流れているものです。女川とは国分寺市の志ヶ窪に始まり、世田谷区の間三橋付近で多摩川に合流するまで、延長約20kmあります。

この清らかなわき水のほとりには、縄文あるいはそれ以前の遺跡があり、かなり昔から人々が生活していたと思われれます。最近までは、豊富な清水を利用して稲作が行われて、ワサビ田

もありました。

この公園の付近では、たくさん人の野鳥や豊かな植物が見られます。

都市化が進んだ今では、木と緑が一体となったこのような自然環境は、とても貴重なものです。

武蔵野のおとがけを残すこの野川の自然をいつまでも大切にし、自然を学び、また自然に親しむ場所として大いに利用していただきたいものです。

なお、昭和四十年代には流域の都市化が進み、家庭排水の流入が多くなって、一時はどぶ川同然になったようである。

## ④ 野川の今昔

三鷹市の天文台前の崖で宅地造成中にほらかり横穴があいて人骨六体が発見されたことがあるが、このように野川周辺は古くから人々が住んでいたところである。

無土器時代・縄文時代・弥生時代と生活していた証拠が各地でみつがっている。無土器時代はナイフ形の石器などがICUや天文台の構内から発見されていることからこのあたりで人々が生活していたことは明らかである。弥生時代になると湧水を利用して水田耕作がおこなわれていたであろう。古墳時代には台地上の古墳の他に崖に横穴の古墳(住居としても使われたかも)が多く作られ、人骨とともに須恵器・土師器が出土している。これから行く龍源寺にも横穴式古墳が大正4年に発見されている。〔「野川は語る」を参考にしました〕

## ⑤ 武蔵野公園

公園の面積は約26ha。広い園内には雑木林・草原・植木畑等、武蔵野の野趣をとどめる公園です。約10万本にも及ぶ植木畑の樹々は都心の街路樹や各地の庭園に移植するための栽培されているものです。道路をへだてた南側は多磨霊園である。

## 7. 二枚橋之記

二枚橋近くの二枚橋衛生組合清掃工場前には、高さ約1m程の「二枚橋之記」と刻まれた碑がある。この碑の裏には、「二枚橋の由来」が書かれている。



その昔、小金井の東南の淋しい山道を流れる野川に、調布や染谷を結ぶ一本の丸木橋がかかっていた。染谷の庄屋の息子は、小金井の山守の娘と恋仲となり、夜毎その橋の袂で逢う瀬を重ねていた。やがて村中の評判となり、頑固な庄屋の怒を買うこととなり、二人は突らぬ恋と諦め、渦巻く野川に身を投げてしまった。暫くして娘の怨念が大蛇となって住みつき、とう一本の幻の丸木橋に化けて村人を惑わし、川の中に落していた。庄屋は二人の供養にと大木を二枚に挽き割って、立派な橋を作り懇ろに霊を慰めた。

以来村人はこの橋を二枚橋と呼ぶようになった。

昭和57年11月吉日 建立

二枚橋衛生組合 管理者 金子佐一郎

## 8. 野川公園

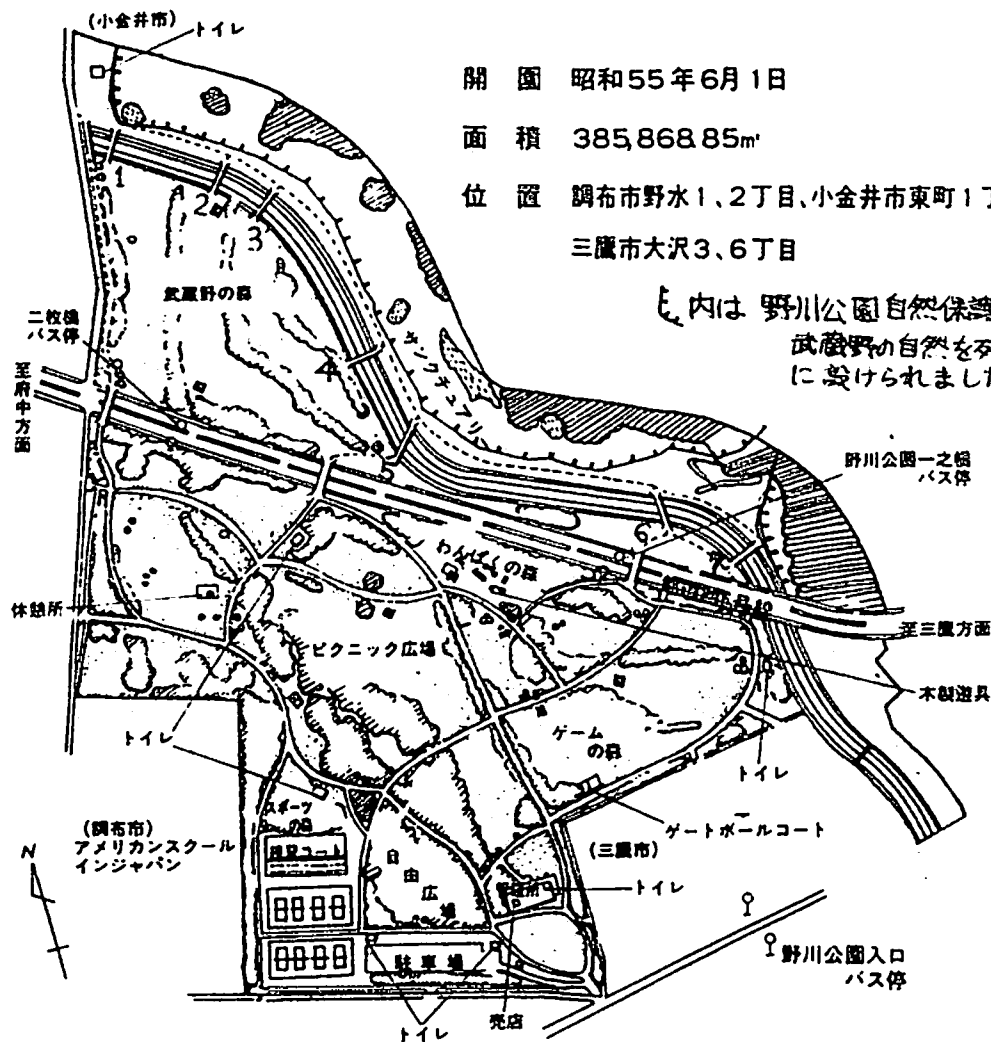
野川公園の位置は、調布、小金井及び三鷹の三市に及び、公園内には、かつては清流であった野川が東西に流れ、また公園内を横断する都道246号線(通称東八道路)によって公園は、南北に分れています。

公園の北側部分(A地区という)は、武蔵野段丘の南縁に当たる国分寺崖線に接し、ハケと呼ばれているところからは湧水が湧き出し、さらに、この国分寺崖線に沿って野川が流れ、このあたり一帯は緑も多く、自然が大変豊かです。

そのため、国分寺崖線に接するところは、大部分が自然保護区になっていて、ここは、自然に親しみ、学ぶ場所として最適です。

公園の南側部分(B地区という)は、かつてゴルフ場であった地形や植栽を生かし広々とした芝生広場となっています。この広場を中心にしてテニスコート、ゲートボールコート、木製遊具も設けられているので、ピクニック、野外ゲー

△、スポーツを行うのにふさわしいところです。 東京都公園協会発行「都立 野川公園のあらまし」より



開園 昭和55年6月1日

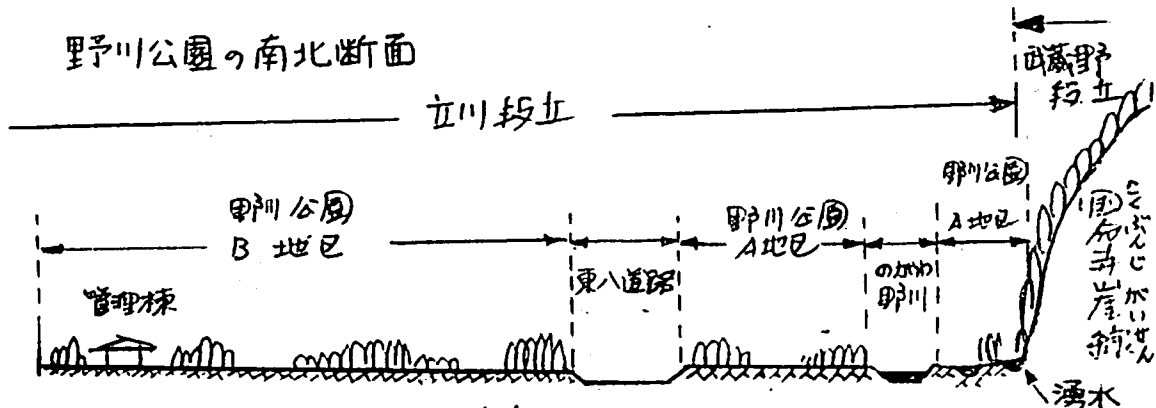
面積 385,868.85m<sup>2</sup>

位置 調布市野水1,2丁目、小金井市東町1丁目、  
三鷹市大沢3,6丁目

園内は野川公園自然保護区です  
武蔵野の自然を残すために  
設けられました

上図中 1は 桧橋 2は 紅葉橋 3は 水木橋  
4は 柳橋 5は 櫻橋 6は 櫟橋 7は 檜橋

野川公園の南北断面





野川公園内の説明板「野川公園でみられる動植物」によると、

公園内でみられる動植物の一部をあげてみました。これらは、  
林や原っぱ、水辺など場所によってみられるものが違います。

### 植 物

#### ○林の中

コナラ、エノキ、エゴノキ、アカシデ、ミズキ、アオキ

#### ○しめった所

セキショウ、ドクダミ、オランダガラシ、ミゾソバ、セリ

#### ○草地や芝生

アズマネザサ、ツユクサ、ヨモギ、メドハギ、メヒシバ、  
オオバコ、ヤハズソウ、チドメグサ、カタバミ、ツメクサ

#### ○植栽地

アカマツ、ヒマラヤスギ、サワラ、クスノキ、イチョウ、  
トウカエデ、アオギリ

### 動 物

#### ○と り

ムクドリ、ヒヨドリ、キジバト、オナガ、シジュウカラ、  
ツバメ、カワラヒワ、キセキレイ、カッコウ

#### ○む し

アゲハ、スジグロシロチョウ、モンキチョウ、ツバメシジミ、  
ヤマトシジミ、クワカミキリ、アブラゼミ、ヒグラシ、  
シオカラトンボ、ナツアカネ

#### ○その他の動物

アズマモグラ、ヒキガエル、シマハビ、アメリカザリガニ

左ページの1～7の橋の読み方

- |   |        |   |       |   |       |
|---|--------|---|-------|---|-------|
| 1 | ならばし   | 2 | もみじばし | 3 | みずきばし |
| 4 | やなぎばし  | 5 | さくらばし | 6 | くぬぎばし |
| 7 | かしのきばし |   |       |   |       |

## 9. 大沢わさび

ワサビの代表的な産地は水清らかな信州や伊豆の山中、というのが通り相場だが、大東京の市街地にも江戸時代から続くワサビ田が残っている。三鷹市の



大沢地区。かつては豊かなわさ木と都心に近い地の利を生かして、農家がワサビや加工品のワサビ漬を生産し、一流の料理屋に「大沢ワサビ」のブランドでもてはやされた。ワサビ漬は根茎を刻んで酒かすにつけたもので、明治22年、東海道本線が開通した際、静岡駅で売り出され、一般に広まり始めたのである。

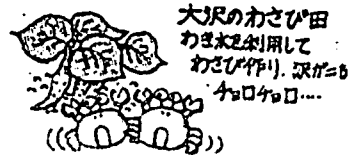
大沢ワサビのパイオニアは江戸時代の<sup>みづのり</sup>質輪<sup>せいとうん</sup>政右衛門で伊勢の生まれ。19歳の時に江戸・麴<sup>もち</sup>町で剣道場を開いていたおじを頼って江戸にきて、後継ぎのいなかった質輪家に養子に入ったと伝えられている。文政2年(1819)、郷里の伊勢・五十鈴川上流から天然ワサビを持ち帰り、大沢の湧<sup>わづらい</sup>水地に植之付けて、次々と栽培地を切り開いた。

文政5年(1822)ごろ編さんされたとされる地誌「武蔵名勝<sup>なづか</sup>函会」は当時の大沢村について「ここの地形は中低き地にて、野林、丘陵ありて、所々より清水湧出す」と記している。大沢に移住した政右衛門は、この豊かなわさ木にいち早く着目し、地形に適した作物としてワサビ栽培を考えついたのだろう。折りしも、この頃江戸ではワサビを挟んだコハダの握りずしが考案され、鼻にツンとくるワサビ特有の風味が<sup>うば</sup>粹好みの江戸っ子に大ウケしていた。政右衛門がその後、ワサビ栽培に本腰を入れた動機の一つに、江戸住まいをしていた時に見聞したであろうことがもとなになっていると思われる。当時、ワサビは高値で取引され、大沢は質のよいワサビの生産地として次第に知られるようになった。江戸末期から明治にかけての栽培の状況を記した文書、資料は残って

いないが、大正期にはワサビ栽培がすでに箕輪家の中心作物の一つになっていた。

昭和初期には十軒を超える農家がワサビを栽培し、(はけ(野川沿いの崖)下一面にワサビ田が広がっていたが、換金作物として人気のあったワサビに、かげりを投げかけたのが、あの太平洋戦争であった。ワサビ田の一部が軍に買い上げられて射撃場に変わってしまったう之に、ワサビそのものが「せいたく品」の烙印を押され、生産高は下降線をたどり始めた。戦後になっても状況は好転しなかった。人口増と開発で周囲の環境は悪化し、わき水の水量の減少が目だつようになった。30年頃を境にワサビの出荷はストップした。

産地としての活力を失った大沢のワサビ田は33年、三鷹市文化財調査委員会の第一回文化財指定で「名所」になった。現在は箕輪家五代目にあたる「三三氏」が先祖から続くわさび栽培を絶やしたくないという決意でほそぼそとおこなっている。わき水の減少は一層めだってきているが、いつまで続けていけるであろうか。



(読売新聞 S60・9・16の記事を参考にした)

## 10. 野川の水車

「新車」と呼ばれるジャンボな水車のあつた家が野川沿いに一件ある。製粉業を営む八代目峰岸清氏宅である。今は機械で製粉しているため水車は回っていない。かつては野川沿いに水車が50ヶ所もあったという。現在の野川は拡幅され、深く掘られて当時の野川とは全く違う。



武蔵野に水車ができたのは、江戸時代(1654年)玉川上水が竣工し、そこから野火止用水などが分水され、新田の開発が進むにつれて、米・麦をつき、粉を挽く量産の必要からであり、水車の改良がみられていった。(後段の文は「野川は語る」より)

有形民俗文化財 水車(新車) 文化5年(1808)以前

江戸時代末期から明治・大正にかけて江戸周辺・多摩地区には水車が数多く設けられた。三鷹地区では野川・砂川用水・品川用水などを利用して脱穀・精米・製粉等に用いられた。

新車と呼ばれるこの水車は文化5年(1808)以前に野川を利用してつくられた。昭和40年、野川が改修されてから水力は使えなくなった。しかし水を受ける大車をはじめ動力を伝える木製歯車・杵などの機構はすべて残っており、実際に稼動していたころの様子を今に伝えている。

## 11. 近藤 勇の墓と生家跡

近藤勇昌宣は天保五年(1834)九月五日、武州多摩郡上石原村1909番地(現調布市野木1丁目6番地の8)の豪農宮川久次郎の三男として生れ、幼名は勝太といった。[大沢村との隣接地]

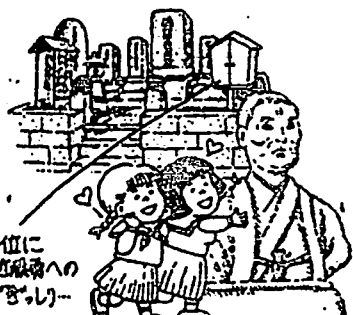
当時、江戸小石川柳町に道場を構えていた天然理心流宗家三代目近藤周助は、宮川家邸内の道場に出稽古に来て、たまたま勝太の非凡の才能を認め、父久次郎に請い、近藤家の養子に迎え、17歳で元服、名を勇と改め、後に天然理心流四代目を継がせた。

文久三年(1863)二月、新徴浪士隊に応募し、後京都守護職松平容保の配下に入り、新選組隊長として京洛の治安維持にその手腕を振った。

しかし、その後幕勢おとろえ、鳥羽伏見の戦いに敗れ、慶応四年(1868)將軍慶喜とともに軍艦富士山丸で江戸に帰った。(以上、調布市郷土史料保存会及び近藤勇史蹟保存会の解説文)

江戸にもどった新選組隊長近藤勇は、あくまで主戦論を唱えて甲陽鎮撫隊を編成し、甲州城占拠を策して失敗。つまり、3月甲府へ進攻してきた板垣軍の食い止めに失敗した甲州勝沼の戦いである。

近藤勇の墓(電沢寺)、  
今日は花を供えに女子  
学生がいっぱいお参りするが



ト20周位に  
女の子が近藤勇への  
よせ参りが多い

近藤はなお同志を糾合し、同年3月中旬、下総国流山の酒造家である長岡屋(今の秋藤商店付近)に陣をとって抵抗したが利あらず、4月3日、大久保大和と変名して単身官軍に降伏する。4月4日越ヶ谷宿で一泊し、5日板橋宿の官軍本部に護送され厳しい取り調べを受け、身分がみせぶられる。そして25日板橋刑場(現板橋駅東口近く)で処刑。享年35才。首は京都三条河原にさらされたが、残りの胴体はこの地に埋められた。明治8年に元新撰組もとに關係のあった永倉新八(杉村善衛)が元副隊長だった土方歳三ひじかた としざうと相談してこの地に追悼の墓碑を建てたのである(板橋駅東口にあり)。一方、処刑後、遺族たちが奔走して故郷の地への改葬を願い、ひそかに板橋にほうむられていた遺骸を運んで菩提寺の意源寺に移した(三鷹市大沢)とされる。

### ◎生家跡

近藤勇うぶゆの生家跡には「近藤勇 生湯の井戸」の碑が建てられていて、産湯につかたとされる井戸跡が残っている。説明板は次のように書かれている

#### 市史跡 近藤勇生家跡

調布市野木1-6-8

指定 昭和52年4月25日

宮川家は、初代弥五佐工門に初まり、現当主豊治氏は十代目にあたる。近藤勇は、幼名を宮川勝太といひ五代久次郎の三男として天保五年(1834)九月に生まれた。

当時、宮川家の屋敷は、人見街道と小金井へ通じる辻にあり、面積は7000㎡(約7反歩)の広さがあった。建物は、本屋165㎡(約50坪)の外、蔵座敷・文庫蔵・乾燥納屋・地下倉・農具入納屋等があり、屋敷内には、樺・檜その他の大木十数本と竹林が茂っていた。

この井戸は、屋敷の南東隅にあり、昭和十八年頃まで宮川家で使用していた。

(後 略)

# 龍源寺について

徳川三代將軍家光の寛永十年（一六三三年）ころに、府中市の武野禪林、龍門山高安寺の第四世家山東伝和尚が来住、後光明天皇の正保元年（一六四四年）に、大沢山龍源寺を開創（承応元年十二月十六日、一六五二年示寂）以来今日まで、三四〇年余、世代は二十五世を数えています。

その頃は、將軍家光、武家諸法度の改定や参勤交代の制度の確立をし、寺社奉行を設置した時代で、野川にそった大沢部落の羽沢・八幡前には約三十年前に応神山本智院（八幡山長久寺）が開創されていました。

龍源寺墓地には

正保四年（一六四七年）

樹閑院秋月宗安居士（其輪家）

寛文十一年（一六七一年）

妙海禪定尼（竹内家）

など当初のものと思われる墓石があります

住時は、高安寺の末寺十ヶ寺の一つでした。

（現在は小金井に千手院があるだけです）

新編武蔵風土記稿には、除地（境内）二段余、小名相曾にあり……と書かれています。

戦後の農地開放（一九四五年）・国際基督教大学開設による買収により、現在は境内地を残すだけとなりました。

境内寺として、白山権現、稲荷社、天神社（三社宮）を祀っていましたが、現在その内の天神社は坂上の八幡社境内に分社されています。

横穴古墳塚（近藤勇墓地向側）には、大沢斜一帯にある古墳群の一つから、六〇年程前の大正四年に発見された白骨一人分（身長推定六尺一寸）を再度葬ったもので、側らに小さな堂を建て、念仏供養が行われていました。

昭和54年3月25日発行

「野川は語る」より

「野川は語る」（大沢住民協議会発行）の筆者紹介

故 菊地全明氏（昭和52年12月死去）

龍源寺住職・三鷹市文化財専門委員（昭和31年より文化財めぐりの会を主催）

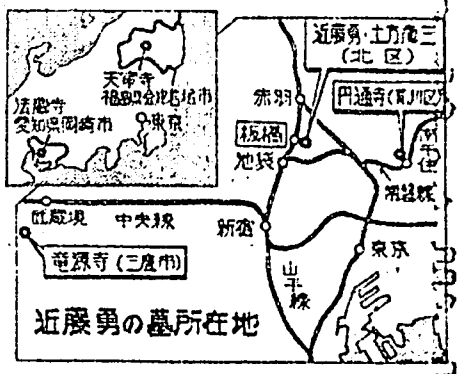
大正6年1月4日 府中市に生まる

昭和52年3月 小平市立第三中学校校長を定年退職

# 近藤勇始末記、に新説

## 胴体の三鷹改葬説

昨が行方不明の板橋板橋町三鷹の甲かな竹林、屋敷の山寺、金無石塚の小高い丘……新選組隊は近藤勇の墓は金無に散らばっている。近藤は昭和四年（一八八〇）、官軍に捕らえられて板橋で処刑された。首は京都へ送られ、胴体はいつたん板橋に葬られたあと、遺族の手で菩提（ぼだい）寺の三鷹・前野等に改葬された——というのが定説になっていた。ところが最近、三鷹では全く板橋に葬られたはずだ、とする断言があらわれた。板橋に埋葬した家もこの説を支持、「首塚」のある登仙山・法蔵寺と板橋で合同埋葬を明かすべく動き始めた。



# 板橋刑場跡の新証 「首塚」と合同慰

近藤勇（板橋山）千蔵）の首は、板橋に埋められた。この首は首をさらわれ、厚田高年（前野高年）の胴体はさくらたかたの馬の肥田土（四五回）を埋めて首を斬るなど、板橋板橋町三鷹の家で切られた。首は京都へ送られて、間でもうがらばらされた。三鷹前野のうちに、胴体は板橋の行方不明で、大きな

断片をよめたのは、子孫次郎重「新選組始末記」（昭和三年出版）だ。同書は勇の義士萬五郎の悔い状として、処刑三日後の夜、刑場の参入に金を手で握り出しの許可を得た。「初彦だ」と証言したのが、三鷹の遺族等は改葬した、という話を載している。

これ以後、新選組をテーマにした著作「新選組始末記」・「海渡正太郎「近藤勇自傳」」・「尾田雄「新選組始末記」」・「新選組」など、板橋板橋町三鷹の遺族等は、この説を支持している。

この説は、板橋板橋町三鷹の遺族等は、この説を支持している。また、近藤勇の生家の流れをくむ三鷹市大沢3丁目、歯科



板橋駅前にある近藤・土方の墓と渡沼改葬さん。右側の小さな墓石の下に首なし遺骨が埋められているという

用体龍源寺改葬説に対して、胴体は板橋に葬られたままだとする新説がでてくるが、町田市の小島資料館（龍源寺）や近藤勇関係の資料がある）ではこの新説を否定している。昭和40年頃、龍源寺の勇の墓を改修した時、墓の下から出た遺骨には、勇が子どもの頃に足の骨を折った跡らしきものがみられたとして今までの定説を支持している。また、近藤勇の生家の流れをくむ三鷹市大沢3丁目、歯科

ない。左肩の鉄筒は、勇と  
 射した」となっているが、勇  
 の手当をした人の記録などか  
 ら勇は右側にあつたことは明ら  
 かで、改組に疑問の余地がある  
 ことを指摘しては、昭康史の  
 「敵敵新編組」では、大膽に板  
 橋説を採用している。

昭康史の「敵敵新編組」の成  
 立経緯をめぐり昨年來、板橋  
 説の支持者になつた。きうかけ  
 は板橋町附近の大地主であつた  
 石田家の手孫、石田亀二さん  
 (註)は神奈川相模原市在住に  
 なつて昨年秋會つたことだつた。石

田氏の資料がある町田市の小島  
 資料館の館では、勇五郎の跡の  
 ほか、昭和四十年ごろ龍興寺の  
 碑を改修したとき、墓のすから  
 出た遺物には、勇が子でつてこ  
 るに足跡を拵つた跡らしきも  
 のがみられた。間違いないと、  
 龍興寺説を支持している。ま、  
 石田も「顕宗會は、龍興寺説  
 を支持している」といふ。

龍興寺、板橋駅前ほか、福  
 井県津市若松市の天寧寺と茨城  
 区千住の円通寺にも「近藤勇  
 の墓」がある。天寧寺の墓は、  
 土方歳三が遺骨を納めたとい  
 われている。

# 信

## 靈祭へ

山崎が祖父から聞いた話で、  
 勇と親交があつた大祖父  
 が、徳川の幕府、現在の墓があ  
 る石田家の敷地に改葬した。  
 昭和三十二年に近藤勇、土方歳三の  
 墓(供養塚)を築造したとき  
 に、さきほかにあつた大祖父の墓  
 の改葬を断つた徳川の墓から勇  
 の墓が移されてきたので、祖父  
 の話に間違いない、といふ。

これが事実なら、近藤勇五  
 郎改葬の三百後に掘り出した  
 遺骨は別人のものになる。遺骨

などこの話も支持したのは、  
 昭和三十二年の頃の板橋  
 説で、昭和三十二年の頃の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の

# 首も深いナツ



## 京都・愛知・山形と諸説

近藤勇の胸体以下ナツに包  
 まれているのが首の行方だ。昭  
 和三年の法政時報に「近藤勇の  
 遺骨をめぐり、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の

昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の

昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の

昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の  
 昭康史の記述は、昭和三十二年の





(132)

### 近藤勇逮捕一件

大久保大和と変名した新選組の隊長近藤勇が、下総國葛飾郡流山村で官軍に逮捕されたのは慶応四年(明治元年)四月の三日である。流山村に中川・古利根川筋に出兵して警戒にあたっていた。

當州眞壁郡坂井村百姓勝吾が、増林村地内で官軍方の手先に逮捕されたのが、この官軍出兵警備中の三月二十四日のことである。勝吾捕縛の容疑は、『誠忠』と書入れた鉢巻を所持し、菰に包んだ大門方まで持参するよう依頼された。勝吾はこの日、原権右衛門らに命じられた通り松伏村から越ヶ谷宿に向う途中、増林村地内で捕縛されたのだという。つまり、『誠忠』と書入れた鉢巻を所持した原権右衛門一行が、流山村で一泊し

に護送され、さらに代官の吟味をうけたが、結局越ヶ谷宿で釈放されることになった。勝吾の申し分によると、郷里眞壁郡坂井村の地頭の用人源権右衛門外一名から道案内を頼まれ、三月二十三日流山村に一泊、翌二十四日吉川町榎戸通りを江戸に向うところ、すでに官軍方出兵により松伏領赤岩村の御屋という旅籠屋で武装を解いた。

ここで原権右衛門外一名の所持する刀や風呂敷包みが勝吾に預けられ、越ヶ谷宿旅籠屋鶴屋清左衛門方まで持参するよう依頼された。勝吾はこの日、原権右衛門らに命じられた通り松伏村から越ヶ谷宿に向う途中、増林村地内で捕縛されたのだという。つまり、『誠忠』と書入れた鉢巻を所持した原権右衛門一行が、流山村で一泊し

に護送された。ここで厳しい取問をうけた後、同月二十五日処刑された。その首は京都に送られて三条河原にさらされた。年いまだ三十四歳であったという。

たという勝吾の供述が、近藤勇の逮捕とどのようにかわりがあるか詳らかではないが、それから間もなく流山事件に進展していることとは興味深い。

なお、四月三日に捕縛された近藤勇は四月四日越ヶ谷宿で一泊し、翌四月五日板橋宿の官軍本部

(写真近藤勇の肖像)

市史編さん室

増林村地内で官軍方の手先に逮捕されたのが、この官軍出兵警備中の三月二十四日のことである。勝吾捕縛の容疑は、『誠忠』と書入れた鉢巻を所持し、菰に包んだ大門方まで持参するよう依頼された。勝吾はこの日、原権右衛門らに命じられた通り松伏村から越ヶ谷宿に向う途中、増林村地内で捕縛されたのだという。つまり、『誠忠』と書入れた鉢巻を所持した原権右衛門一行が、流山村で一泊し



「広報こしかや」より

筆者は 本間清利先生

### 宮川家の墓地にあった辞世の碑

#### 近藤勇辞世

孤軍援絶作俘囚 顧念君恩淚更流  
 一片丹衷能夠節 睢陽千古是吾儔  
 靡他今日復何言 取義捨生吾所尊  
 快受電光三尺劍 只將一死報君恩

昭和三十三年四月二十五日、津雪園利謹書

# はけの道

大間昇平氏



あえてはけの位置を国介寺と武蔵小金井の間としたのは毛子ル館などを添えかけたくなかつたから

女小説の巻頭に綴った地区(一部)

ムジナ坂  
明治の中ごろ人が通るとガサガサと

「はけの道」の命名者は私存のてす(48年)

小説「武蔵野夫人」のヒロイン宮地道子の股のモデル

谷口文男氏  
今も生活用水として使っている

小金井  
(金取町)の

小金井街道  
樹齢300年以上のヤマキヒノミズ

小次郎宅跡地  
社伊集原東側の遺る並木は民間あり

石臼塚の碑  
石臼の跡

小金井  
三井

はけの道  
の敷地  
のミヅル

大間昇平氏が昭和23年1月から11月まで家族と共に寄寓し、小説の構想をなつた

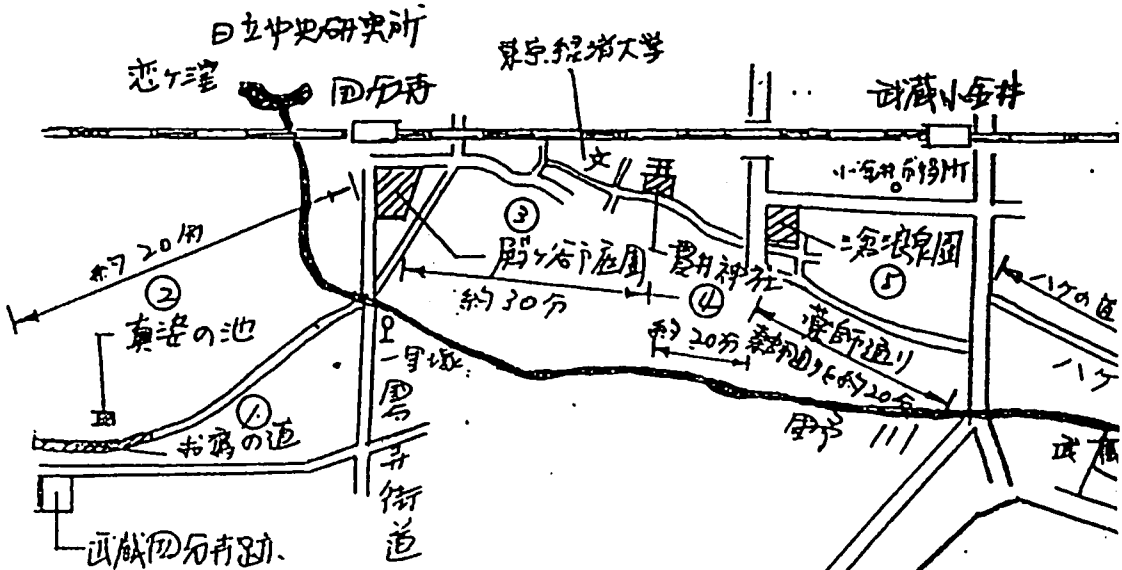
65歳没、天保3年(1838)長五郎

小金井神社  
石臼塚の碑



読売新聞56126より  
(一部) 読売新聞より転載

# 野川沿いの湧水(名)



## ① お鷹の道 (名水百選の一つ)

江戸時代に將軍家が鷹狩りに行き来するのに使われたといわれる。湧水の流れに沿って遊歩道である。

## ② 真姿の池 (名水百選の一つ)

らい病で醜くなった美女が薬師に祈りつづけていたうち、2/1日に童子が現れその誘いに応じてこの池で顔を洗ったところ、もとの美しい姿に変わったという伝説の池で、きれいな湧水をたたえている。

## ③ <sup>このルネ</sup>殿ヶ谷戸庭園

旧岩崎家の別邸、東京都が買収し、昭和54年に有料庭園として開園。自然の地形をいかした回遊式庭園で崖下に湧水をたたえた池がある。

## ④ <sup>ぬくい</sup>貫井神社

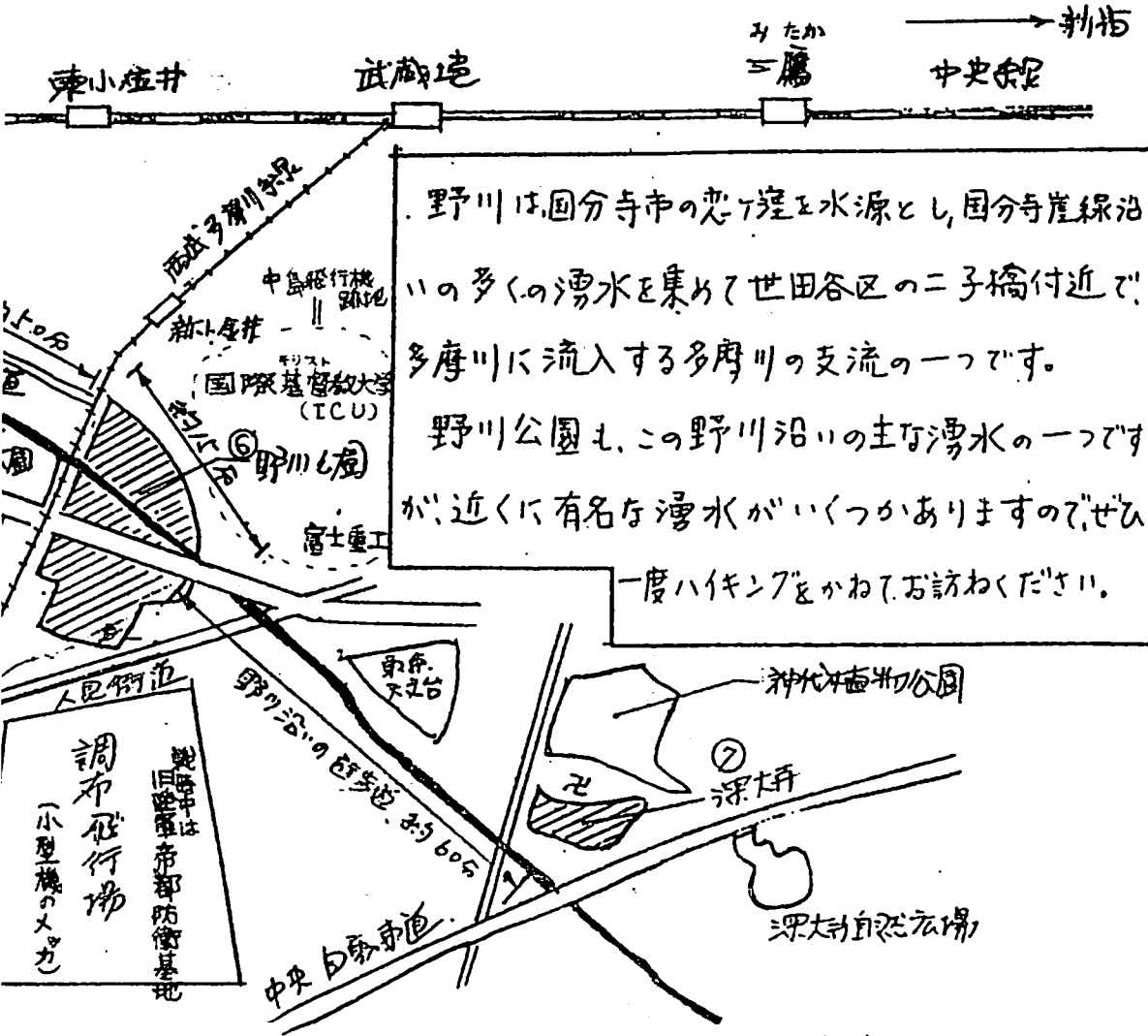
旧貫井村の村社祭に貴命で境内に湧水を

## ⑤ <sup>そうらせんえん</sup>滄浪泉園

元外交官渡多野承園名は、大養木堂元首ハケの湧水をたたえ心になつている。

訪ねる散歩道

昭和60年9月  
野川公園管理所



野川は、国分寺市の恋ヶ窪玉水源とし、国分寺崖線沿いの多くの湧水を集めて世田谷区の二子橋付近で多摩川に流入する多摩川の支流の一つです。  
野川公園も、この野川沿いの主な湧水の一つですが、近くに有名な湧水がいくつかありますのでぜひ一度ハイキングとかねてお訪ねください。

大姫島村市  
池がある。

旧別邸  
が名づけた。  
池が園の中

⑥ 野川公園

水と緑が豊かな公園。  
野川が公園の東西に流れている。国際基督教大学側の崖下から豊かな湧水が流れ出て野川にそそいでいる。

⑦ 深井

天平5年(733)に瀬工上人によって開山された。湧水と森にめぐまれた武蔵野きつての右刹である。境内各所には、多くの湧水があり、小さい水とたまたま池がある。